

「施設」論ノート

本間 真宏

1

社会福祉の具体的な内容が問われるとただちに「施設に収容して保護すること」と答えられるほどに、福祉↓保護↓収容という理解は一般的であるといわねばならない。このような状況にあって児童福祉のばあいはもちろん、社会福祉について考えようとするばあい、「施設」という問題を除くことはできないであろう。(1)

さらに、そのような理解が余りに一般的であるということが、福祉の歴史的な展開と無関係ではないことを知らねばならない。たとえば、孤児ないし貧児の救済のための施設、精神的・身体的な障害をもっているひとのための施設がどのようにして生じ、現在に至っているかを理解することは「施設」の今後の方向を考

えるうえで重要である。(2)

現在においてみられる福祉のための施設はきわめて多様である。それは福祉の対象の拡大を意味し、さらに福祉というものの性格ないし目標が大きな広がりをもって受け入れられてきていることを示している。

本稿は、児童福祉施設を中心としながら、社会福祉のための施設がいままでに問われ、また内部から問われてきた問題のいくつかを検討してみようとするものである。

第一に「施設は家庭の代替物である」ということについて考えておかなくてはならない。このことは、とりわけ児童福祉の領域において重要な問いかけである。

このような考え方の前提にあるのは、家庭を「二次

的集団」⁽³⁾とよんで特別な意味を付与し、何らかの原
因でそれを失ったものに「施設」が必要とされるとい
うものである。さらに、親（とりわけ母親）と子ども
との関係を、他の人間関係とは異なる特別なものとみ
なすような考え方がそれを補強する。かくして、児童
の福祉の措置は、まず⁽⁴⁾できるだけ施設に収容するこ
とをさせて、里親などに委託すること、ついで⁽⁵⁾施設
をできるだけ家庭に似せたものとするということという方向
をとるようになった。後者についていうならば、大舎
制から小舎制への移行、家族構成に擬した職員の配置
の仕方などがみられる。

さて、われわれは児童を権利の主体として認めたい
えで、やはり、子は親のもとで養育されることが望ま
しいのであり、親がいるかぎり、できるだけそのよう
な条件を整えてやる必要があると考える。それ
がどうしても不可能であるばあいにも、あくまで主体
としての児童の立場にたった福祉の措置が構じられね
ばならないのである。

ところで、施設の家庭化であれ、里親への委託であ
れ、そのような意見の背後にあるのは、施設Ⅱ集団で
の生活のなかで形成されるところの好ましくないパー
スナリティ、すなわち「ホスピタリズム」⁽⁴⁾に関する
さまざまな考え方であろう。詳述はさけるが、それが
施設を消極的にとらえ、その存在を必要悪としてとら
えさせてきたことに注意しておかなくてはならない。
また施設のもつ諸機能を積極的に評価するばあいにも、
それが障害となっているのである。

社会福祉の概論書として定評のある著書⁽⁵⁾で、W・
フリートランダーは「どのような児童が施設での保護
を必要としているか」として、「ある種の親や児童に
とっては里親よりも施設への措置の方が好ましい」こ
とを述べている。手短かに要約してみよう。

(1) 親が実在していて、情緒的に強く結びついてい
るケース

(2) 里親との間に、優しい情緒的な関係を確立しえ
ないケース

(3) 里親に委託されていて、それが失敗したケース
 (4) 里親では受容しえない、専門的な処遇を必要とするケース

(5) 兄弟姉妹で分離して保護されることを望んでいないケース

(6) 年長児童で、自らの家族のみならず里親のもとにも定着しえないケース

(7) 同様に、いくつかの理由で短期間の保護を必要とする、ないし集団生活の体験の必要があるケース

これらをみても、施設をたんに家庭の代替物である
 とみなすわけにはいかないであろう。主体である児童
 にとっては、家庭が基礎的な養育の場であるのと同様
 に、施設に入所している児童にとっても、家庭とは異
 った意味で、基礎的なものをそれはもたなければなら
 ない。いままでとは違った施設観がようやく定着しつ
 つあるなかで「集団」の特性を活かしての養護はさま
 ざまな困難をかかえている。(6)けれども、それらをの

りこえていくところにこそ、児童の福祉を守り、施設
 の主体性が維持されるということを知らねばならぬ。

第二に、いままでの保護が「施設中心主義」であ
 り、しかも「劣等処遇の原則」のもとにあることにつ
 いて考えなければならぬ。

もともと、「施設」の存在の理由のひとつ（といっ
 ても、根本的なものである）が、貧困対策ないし社会
 防衛的な発想なのであり、そこに収容されている人び
 と（児童も含めて）の生活に対する配慮はほとんどみ
 られなかったといつてよい。そのような状況のなかで
 「対象者のための施設」としての有り様が問われるよ
 うになったのは、いくつかの例外を除いて、(6)比較
 的、新しいことなのである。それでもなお、いくつか
 の報告書は「まず、施設があつて、そして対象者があ
 るような状況」⁽⁸⁾をつたえている。

何故、従来のそれが「施設中心主義」的なものとな
 らざるをえなかったのか、そしてまた、現在もそのよ
 うな状況にあるのかということに答えることはかた

んではない。ここでは次のようにしかいうことができない。すなわち、社会福祉の実践が目標としている、対象の拡大と最低線の引き上げという点から説明できるのではなからうか。たとえば、この事業の対象をきびしく制限することによって（その結果としてあるのはいうまでもなく、「家族」を重視し、責任を負わせるものである）、たんなる保護対策とみなす、また社会防衛対策（犯罪者や精神異常者など）としての意味をもたせ、かくして必要最小限の施設の存在と家庭にあるものの生活よりもさらに低いレベルに位置づけることが可能であったということである。

施設に対してみられる偏見なども、そのようなことと無縁ではない。つぎのような母親の言葉をどのよう

に、われわれは理解しなければならぬのだろうか。

「私は新しいテストを受けるたびに、お医者さんたちはなにを発見したのだろうかと気がかりになりました。でも、その結果がどうであろうとも、私はデビィをけっして特殊施設には入れまいと、心ひそ

かに決心しました。たとえ、こんご一生この子を腕に抱きつづけなければならぬとしても、かまわない」。(9)

このような意見のあることを知ったうえで、そしてさきにみたような施設の歴史的な変化を考えたいうえで、なお、福祉のなかで果している施設の役割をわれわれは考えていかななくてはならないのである。

第三に、パースナリティの形成、成熟ということをし施設との関連で考えるばあい「小集団」についての研究をみておくことが必要であろう。

清水幾太郎は、「社会的人間論」のなかで、人間を(一)行動するもの、(二)習慣の統一体、(三)社会によって作られるもの、と規定し、いくつかの集団を移行していくなかで人間の成長、発達について論じている。そこにおいて、「家族」という集団は次のような規定を与えられ、重視されている。すなわち、「人間のパーソナリティの基礎並びに輪郭は人間が家庭のみを天地として生きている間に形成せられる。如何なる家族集

団に生れ且つ育ったかは、人間の社会的形成と社会的運命との大半を決定する」⁽⁴⁰⁾のである。

このような幼児期における家族集団のもつ役割の重要性について論じたものは数多い。それが「家族」集団のみを不当に評価しがちであること、別言すれば、ひとの可能性を奪ってしまうのも家族であるということとを、さきの指摘から読みとることが必要であろう。

ところで、施設を積極的に評価しようとするひとはもちろんであるが、その意義を低くしかみないひとであつても、人間の生活のなかで（とりわけ児童期において）「指導された集団における活動」が大事なものであることを知っている。「学習から教育へ」⁽⁴¹⁾という変化が集団を媒介としていることもよく知られているところである。

そして、われわれはアメリカにおいて発達したソーシャルグループワークの前提にある、ひとの権利を承認し、守っていく場としては小集団が最適である、ということに注目しなければならない。⁽⁴²⁾すなわち、民

主的な人間を形成する場として小集団における活動は高く評価されている。⁽⁴³⁾たとえば「保育に欠ける」児童にとつての保育所が、たんにそれのみにとどまらず、広く全ての児童の福祉を保障するセンターとしてあり、集団のなかで形成されるパースナリティの重要性も忘れられてはならない。さらに、家庭にある児童が体験する寄宿舎での生活やサークル活動、グループでの合宿などがその成長において有意義なものであるように、施設が果している役割のいくつかは経験的に、意味あるものとしてみなされねばならないものである。

人為的で制度化された集団としての施設であるが故に、対象のもつさまざまな属性に応じて考えられる方法を、適切に用いることで、「家庭」での生活体験とは異なるが、しかし有意義な体験を与えることができるはずである。「施設におけるグループワーク」⁽⁴⁴⁾の発達や「専門化された職員」の養成などが求められる理由のひとつがここにあるといえる。とりわけ、職員

の問題は大きい。

第四はするように、福祉を担う職員についての問題である。が、その有り方、養成の問題は現在、そちちで論じられているところであり、⁴⁴ここでは概略的に述べてみたい。

たとえば、設備や備品などの物質的なものが不十分であったとしての、人と人との交わりのなかでそれをのりこえてきたいくつかの事例⁴⁵、さらにいままで述べてきたような劣悪な状況や偏見にめげず、収容されている人びとに対して献身的な努力をなしてきた従事者へのたかい評価などはよく知られている。

だからといって、私は「福祉は人なり」というような、物質的条件の不足を補うものとしてのそれを安易に認めるわけではけっしてない。むしろ、不十分さを補っていく、ないし創造していく活動は、それがひとつのプロセスとしてあるときに認められるものであり、⁴⁶われわれの福祉への視点は現在の文化が与えられる全てのものがまず与えられて、そのうえで次の世

代が新たに生みだす努力を支えていこうとするところに位置づけられねばならない。

ボランティアの問題⁴⁸も、従事者のそれとあわせて論じられなくてはならない。しかも、それが、あるばあいには、とかく閉鎖的な性格をもつ施設を外界と結びつけるものであるだけに、たんにボランティア個人の満足や葛藤だけで終らせるようなものであってはならない。「赤い羽根」募金運動への批判にもみられるように、善意の行動が全体としての福祉への責任をないがしろにしているような状況の克服がめざされねばならないであろう。

施設は本質的に家庭とは異なるものであって、どのように似せようとしても、つまりは対象者を困惑させるだけである。むしろ、家庭ではけっして与えられないものを体験させることを意図しなくてはならない。そこに、専門化された職員の必要性和、創造的な営みが（対象者とともに）なされねばならぬ理由をみとめるのである。

〈註〉

- (1) たとえば社会福祉関係の予算についてみる必要がある。児童福祉のばあい、年度で若干異なるが、予算の八割が全体のなかでは一割位である「要保護児童」のための施設関係に支出されている。無論、その比率のみにとらわれてはならないことはいうまでもない。このことについてはあらゆる類書が触れているが、最近において出版されたものをあげておく。辻村泰男「児童福祉学」一九七〇、光生館。木田市治「児童福祉学」一九七〇、朝倉書店。木村武夫編「現代日本の児童福祉」一九七〇、ミネルヴァ書房。日女大編「児童福祉—日本の現状と問題点」一九七一、家政教育社。
- (2) たとえば次のものが参考になる。Queen, S.A. "Social Work in The Light of History" 1922 (高橋訳, 1961. ミネルヴァ書房)。一番ヶ瀬康子「アメリカ社会福祉発達史」一九六三、光生館。高島進「社会保障と社会福祉」一九七〇、汐文社。Hey wood, J.S. "Children in Care—The development of the Service for the deprived child" 1959 (内田訳, 1971. ミネルヴァ書房)
- (3) Cooley, C.H. "Social Organization: a study of the larger mind" 1929 (大橋・菊地訳, 1970. 青木書店)
- (4) Bowlby, J "Maternal Care and Maternal Health" 1951 (堀田訳, 1962, 旺文社) 小嶋謙四郎「母子関係と子どもの性格」一九六九、川島書店
- (5) Friedlander, W.A "Introduction to Social Welfare" 3ed 1968. PRENTICE-HALL, INC. pp 368—388
- (6) たとえば「児童養護」全社協養護施設協議会刊、第一巻二号などが参考になろう。
- (7) 吉田他著「人物でつづる近代社会事業の歩み」一九七〇、全社協。
- (8) 池沢明「少年の家の記録」一九六七、新日本出版社
- (9) Segal, M "Run Away, Little Girl" 1966 (露沢訳, 1967, 日本文化科学社, 34ページ)
- (10) 清水幾太郎「社会的人間論」角川書店、二三ページ。
- (11) 清水義弘「教育社会学」一九五六、東大出版会
- (12) 服部正「ソーシャルグループワーク」一九六二、ミネハタ書房。Knopka, G "social Group work-A Helping Process" 1963 (前田訳, 1967, 全社協)

- (13) 北川隆吉「小集団をめぐる問題」(『思想』三八九号所収)

- (14) Konopka, G "Group Work in the Institution" 1954
(福田訳, 1967, 日本 YWCA 同盟出版部) 窪田暁子
「グループワーク」一九六九、誠信書房

- (15) たとえば、「東京都における社会福祉専門職制度のあり方に関する答申」などを参照されたい。

- (16) たとえば、註9におけるM・シーガルと比較しつつ、次を参照されたい。

『奥さんに申し上げますが、お子さんは決して正常にはなりません。ご自身を欺くことはおやめなさい。貴女が望みを捨てた真理を受け入れなければ、貴女は生命をすりへらし、家族は乞食になるばかりです。(中略) 貴女のお子さんは貴女の全生涯を通じて、貴女の重荷になるでしょう。その負担に耐える準備をなさい。このお子さんは決して正確に喋れるようにはならないでしょう。奥さん、準備をなさい。中でも、このお子さんが貴女のすべてを吸収してしまうようなことをさせてはなりません。お子さんが幸福に暮せるところをお探さない。そし

て其処にお子さんを置いて、貴女はご自分の生活をなさう。』Buck, P.S. "The Child Who Never Grew" 1950

(松岡訳, 1950, 法大出版局, 44—5ページ)

- (17) たとえば、A・マカレンコ「塔の上の旗」などを参照されたい。

- (18) 副田義也「ヴォランティア論」(『更生保護』巻二十二、九号所収)

2

視点を児童福祉施設に限って、考えていくことにする。私はさきに「対象」を規定している要因を考える。作業のなかで(1)、(1)要保護児童、(2)一般児童という二通りに対象が峻別され、それぞれに対策が構じられて、いることについて若干の検討を加えておいた。それを要約的に示せば次のようになる。すなわち、児童福祉法の理念である全ての児童を対象とするという考えは、「要保護性」という枠を操作的に用いることで、一部の児童の保護ということに転化してしまっている

ことであり、さらに、「要保護児童」への経済的負担を理由として、児童全体に対する施策がなおざりにされているのではないかということであった。

さて、対象となる児童は「要保護性」という、ある種の「準抛枠」に適合するものであり、しかもそれは「政策主体」が操作的に用いるものであった。しかもそこにおいては、児童のもつ負の属性より判断されるべきであると思われるのに対して、すでにあるところの「児童福祉施設」から規定されているような状況がみられるのである。たとえば、それは保育所やその他の施設にみられるように、その数の不足は、対象となるべき児童を疎外しているといえないであろうか⁽²⁾。このような意味で、対象を考える作業は「施設」についての検討を無視してはおこなえないといえるのである。

まず、児童福祉法に規定されている施設をどのように理解するか、というところから考えてみよう。ひとつの試みとして図示してみたが、それに従ってみていくことにする。とりあえず図示するにあたっての前提

在宅ケア	
療育的ケア	保育所 児童厚生施設 精神薄弱児通園施設
	教育的ケア
助産施設 乳児院 し体不自由児施設 盲ろうあ児施設 虚弱児施設 重症心身障害児施設	母子寮 養護施設 精神薄弱児施設 教護院 情緒障害児短期治療施設
施設ケア	

を二、三言っておかなくてはならない。第一に軸の設定において「在宅―施設」としたばあい、「地域」ケ

アとしての考え方がどうしてもなおざりにされてしま
う。しかも、大事なことは家庭といい、施設といつて
もそれらは「地域」に包含されていることである。そ
こで地域をどのように規定するか、ということは、今
後の福祉を考えるうえで無視しえないものとなる⁽³⁾。

第二に「教育―療育」という軸についてであるが、前
者には社会的、心理的な何らかの保護、援助が必要で
あり、後者は医学的なそれが必要とされるものと理解
する。第三としては、このような軸のもとに、さまざ
まな施設を厳密に検討してみると、それぞれの位置が
違ってくることはもちろんありはずであるが事柄の性
質上、それらは捨象されていることをいっておかなく
てはならない。

こうしてみると、現在ある施設は、相当の偏りをも
って存在していることがわかる。第一に「施設」とは
収容して保護するものであるという一般的な理解が妥
当することがいえよう。一四種類の施設のうち「在宅
ケア」に属するものは三種類にすぎない。しかも、そ

のそれぞれが、現在、ひとつの岐路にたっているの
である。たとえば、保育所は幼稚園との関係において、
児童厚生施設はより広い社会教育的な施設との関係に
おいて、さらに精神薄弱児通園施設は特殊教育との関
係において、それぞれに性格が問われている。これら
がどのように位置づけられるかは、今後の大きな課題
であるが、もし「施設ケア」のみに限定されていくと
すれば、それは児童保護という言葉で表現されるとこ
ろの狭義の福祉が意味するところとならざるをえない
であろう。そしてそれがますます、児童福祉法の理念
から遠ざかるものであることはいうまでもない。

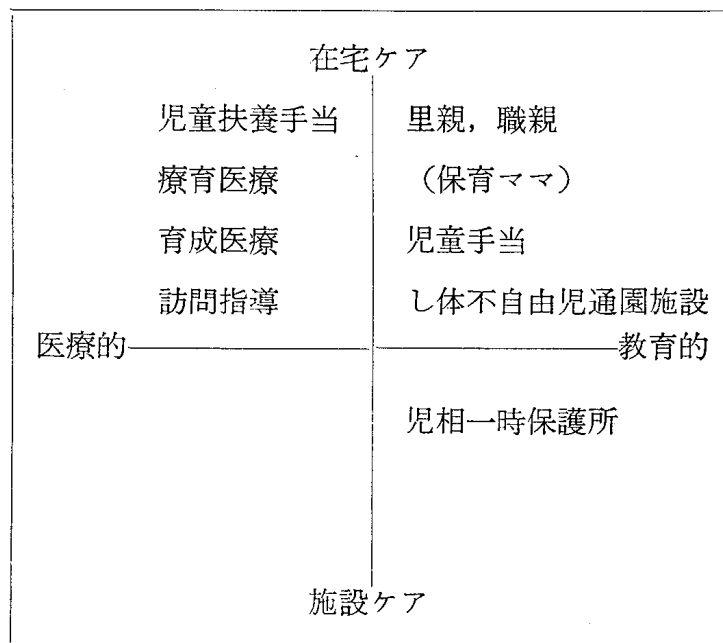
第二に収容施設の種類の多いことがそのまま、児童
福祉の充実を示すものであるかどうかを検討されなく
てはならない。現代の傾向が、個別的な、専門的な処
遇を目指すものであるだけに「施設」が多様化されて
いくであろうことはうなずける。他方、総合化されて
いく側面にも注意しなければならない。「重症心身障
害児施設」をどのように性格づけるかは、今後の施設

の、ひいては福祉の有り様を方向づけるように思われる。それとともに、個別の施設がもつ多くの問題が、その「最低基準」と絡んでとりあげられている⁽⁴⁾。そのような動きは今後とも、活発にとりあげられることが必要である。ところで、施設が児童の最低生活を保障する⁽⁵⁾場であり、その措置にあたって、「貧富ということを必ずしも必要とせず、児童が要保護という要件に該当」⁽⁶⁾すればよいという表現のなかに、現実の不平等に眼を閉じて理念のみが先行している事実をみることが必要である。費用の負担についての厳格な規定は、逆に支払能力がないからこそ「施設入所」という形で結果することを知らなくてはなるまい。

第三にいままで述べてきたような文脈において、「施設」というものをどのようにみなすかということである。理念としての法的平等を現実における経済的不平等にどのようにかわらせていくのか、ということになるが、ある研究者のように、「児童育成の前提としてある家族について、婚姻尊重か私生子保護かと

いう対立のさせ方ではなく、親か社会かという選択の仕方の問題を展開させてゆく」⁽⁷⁾ことになる。そして、施設のもつ欠陥をできるだけ除去しつつ、その利点を日日の実践のなかに活かしていくことなのである。

つぎに、「施設」以外に、児童のための「福祉の措置および保障」を、さきと同様の軸によって分類し、図示してみよう。主題から若干それるが、施設を把握し直すうえでみのがされるべきでない。さきにみたところと比較して気付くことは、「在宅ケア」の方に偏りがみられることである。しかも、それらは厳密に言えば、ほとんどが「経済的」なサービスであることがわかる。これらを防貧的な施策とみなすか、たんなる救貧的なそれとみなすかは考えの分かれるところであるが、福祉が目標とするところとしてはもちろん、前者の具体化として考えなければならない。それは、さきにみたように施設ケアが救貧という傾向をいままなお有しているところと対照的でさえある⁽⁸⁾。し



かしながら個別的にみると、新しい児童福祉の理念にもとづいたものとしては考えられないようである。たとえば「里親」によるケアにしても、児童が里親の老後を保障するものとして、ないしは里親の家庭での労働力を補充するものとしてみなされがちである。その点において、里親によるケアと施設ケアとの中間に

設定されているのが「家庭養護寮」⁽⁹⁾という形態であるが、児童福祉の理念を実現するいくつかの条件がみたされないかぎり、たんなる折衷だけでしかない。

いままでみてきたように、家族と施設とのケアのみでは、福祉の対象としての児童の処遇が十分になされないものである。それらがともに包含されている「地域」に視点を向けることが必要になってきている。ところで、この事業の対象にたいしてのさまざまな保護において、「地域」に重点をおかねばならないということは新しいことではない。たとえば、セトルメント活動に集約してみられるような、教育、医療、法律などの相談ないし援助は、「地域」そのものの改良や変革を意図しているものである。けれども、それが対象となる個人および家族のみにとらわれていて、地域の全体としてのそれにまで及びえなかったことを知る必要がある。⁽¹⁰⁾

それが、新たな観点から「コミュニティ・ケア」という形でとりあげられてきたことについてはいくつか

の理由がある。

まず、(イ)対象児童がもつ問題は、たんに彼および家族のみに特有のものではないという認識であり、いわば福祉概念の拡大されつつある現実があげられる。⁽⁴⁾

ついで、(ロ)福祉が救済ないし対症的な性格から、問題発生メカニズムを分析するという、いわゆる社会科学的方法にうらづけられてきたことがいえよう。

ところで、そのような「コミュニティ・ケア」という考えが、ともすれば従来の「家族―施設」という保護の形態にのみとらわれていると、「単に保護対象者を地域社会にとどめて保護する点にあるとする限りでは、それは在来の「居宅保護」ないしは「在宅者サービス」と同じもの」⁽⁴⁾となってしまう。

地域住民の自発的な参加を基礎として、いままで主体と考えられていたもの（たとえば行政機関、施設など）を包含していくところにこそ、そのような発想を実現していくことができるのである。⁽⁴⁾それは、ひと

つには個別化され専門化している福祉をあらためて総合化することである。つまり、言葉の正しい意味での「ゆりかごから墓場まで」の生活を保障し、しかも、それがあつた一部のもののみを対象とするのではないということなのである。

児童福祉施設がそのような、コミュニティ・ケアを実現するところのひとつの有力な手段であることはいうまでもない。行政ないし一部の篤志家によつたあり方は、いま厳しい反省のうえにたつて地域のなかでの位置づけを探っている状況にあるといえよう。⁽⁴⁾

おわりに、それと関わる従事者養成上の問題（とくに保母のばあい）について述べてみたい。現在、「施設」での実習は必修としてカリキュラムに組まれている。短い実習期間を有効に活かすための方法が重要であることはいうまでもない。しかも、自発的な行動として動機づけるためには、まさに「施設」が地域のなかに開かれていなくてはならないのである。そういう意味で「見学」は重視されるべきである。もちろ

ん、対象者個人の秘密は十分に守られねばならぬ。いままでの実習が余りに技術的な側面にとられ、人間観とか福祉への関心という形に終始していたのに対して、今後のそれはさきにみたような社会認識を広め、深めていくものとして考えられていかなければならぬであろう。⁴⁹

△註▽

- (1) 拙稿「発達保障論序説(一)」本学紀要第七号所収
- (2) 山本実「子どもの権利」一九七〇、明治図書出版、六四ページ
- (3) 副田義也「コミュニティ・オーガニゼーション」一九六八、誠信書房
- (4) 全養協、各年度「施設長研究協議会」のレジюмеなど参照のこと。
- (5) 社会福祉行政研究会「社会福祉法制論・財政論」一九六四、新日本法規出版、三六二ページ
- (6) 前掲書、三六六ページ
- (7) 後藤平吉「家族と法」一九七〇、ミネルヴァ書房、一

六五ページ

- (8) 一番ヶ瀬康子「家庭・児童・母子福祉」(真田他編『社会福祉論』一九六八、有斐閣所収)、一七四ページ
- (9) 小笠原平八郎「里親保護」一九六七、川島書店、二三ページ
- (10) もちろん、個人ないし集団としてのセツラーの善意のみでは限界のあることはいうまでもなからう。さらに、支配階級によるさまざまな圧迫が加えられることで、セツルメントは押し込められ変形させられていったことを知らねばならない。次を参照されたい。
高島進「前掲書」所収の論文。Addams, J "20 Years at Hull-House" 1910 (柴田訳, 1967, 旺文社刊)
- (11) 一番ヶ瀬康子「現代社会福祉論」一九七一、時潮社、五九ページ。引用してみると「つまり、『他人ごとではない』ことへの科学的認識に立つ探求を無視あるいは喪失することこそ、社会福祉論としてどのように論理的に明快に展開されても、おそらく結果的にはいつか空転するであろう」。

(12) 岡村重夫「地域福祉研究」一九七〇、柴田書店、四ページ

ならない。

(筆者) ほんま・まさひろ 保育科 児童福祉担当

(13) 松下圭一「シビル・ミニマムの思想」一九七一、東大出版会。同「市民自治による市民福祉を」(『社会福祉研究』九号、弘済会館所収)

(14) たとえば、全養協の二五回大会が、「地域福祉活動」へのとりくみを考える分科会を設定していることなど。

なお、宇治谷義雄「地域の要求に応じた児童収容施設のあり方」(『日福大研究所年報』一号所収)も参照。

(15) 児童福祉施設がその機能を十分に営みえないでいる理由のひとつとして、従事者にかかわる問題がある。それは現在のところ労働条件の問題とともに、養成のための教育がいまだ体系化されたものとなっていないところに考えなければならぬ要因がある。保母のばあい、さきにみた「施設」の多様さと児童のもつ諸特性とが絡まって、その職務を明確にさせていることがいえる。

対象の規定が主体である従事者についてまで及んでくることがきわめて大きいこの領域において、今後の研究に残された部分が全くに多いことをいっておかなくては